高齢者のセルフエフィカシーと関連する心理社会的要因に関する調査研究
ー　在宅高齢者と老人保健施設入居者に着目して　ー

松　本　耕　二
山口県立大学社会福祉学部・助手

研究協力者
青木邦男（山口県立大学・教授　）
横山正博（山口県立大学・助教授）

抄　録

本研究では，在宅高齢者および老人保健施設入居者のセルフエフィカシーの実態とセルフエフィカシーに関連する心理・社会学的要因を検討することを目的とした質問紙調査を実施した．在宅高齢者調査は選挙管理人名簿より 550 名のサンプルを無作為抽出し郵送法により実施し 312 名(男性 149，女性 163)の有効サンプルを得た．また施設入居者調査では 55 施設 550 名を対象として自記もしくは施設職員によるヒアリングによりデータを収集し 30 施設入居者 255 名(男性 67，女性 188)の有効サンプルを得た．そして以下のことが明らかとなった．

１．在宅高齢者および施設入居者のセルフエフィカシー得点の平均値と標準偏差は，在宅高齢者8.44±3.96点，施設入居者は7.35±4.02点であった．また二要因配置分散分析の結果，性別において有意差がみられたが在宅高齢者と施設入居者の差はみられなかった．

２．在宅高齢者のセルフエフィカシーに有意に関連した要因は「性別」「抑うつ状態」「ポジティブ・ソーシャルサポート」「主観的幸福感」の４要因で，抑うつ状態が低いほど，性別では女性よりも男性で，主観的幸福感が高いほど，さらにソーシャルサポートではポジティブなサポートが多いほど，セルフエフィカシーが高い結果であった．

３．施設入居者では「子どもの有無」「日常生活動作能力」「抑うつ状態」「ネガティブ・ソーシャルサポート」の４要因で，抑うつ状態が低いほど，日常生活動作能力が低いほど，子どもがいる方ほど，さらにソーシャルサポートではネガティブなサポートが少ないほど，セルフエフィカシーが高いと解釈された．

以上のことから，施設入居者のセルフエフィカシーは在宅高齢者とほぼ同水準であることが明らかにされ，施設サービスの有用性が示唆された．